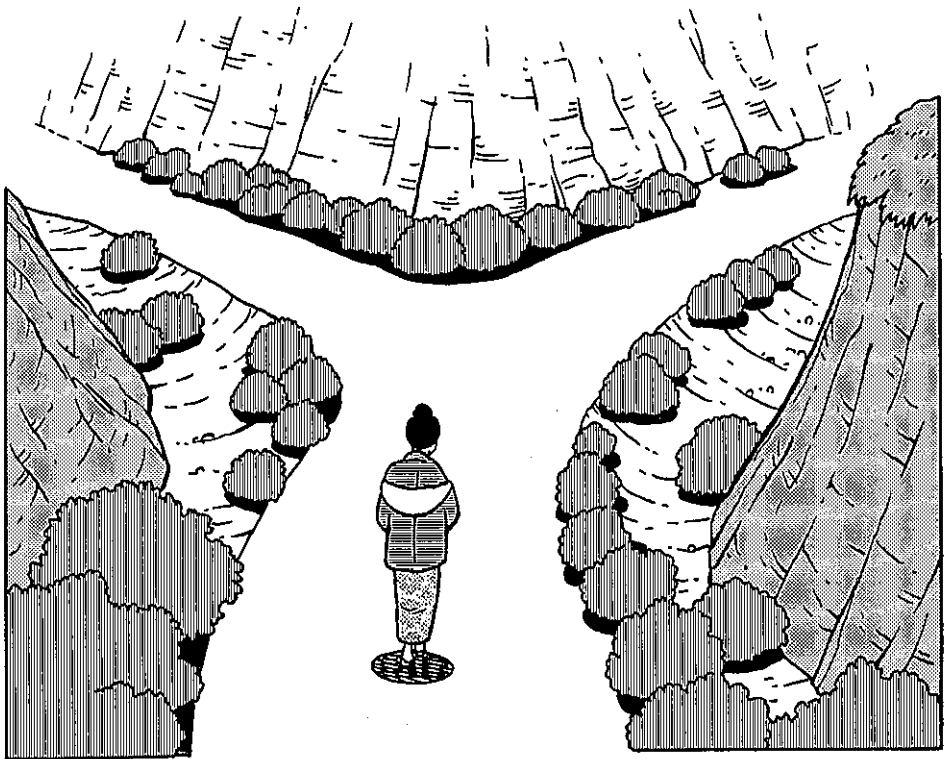
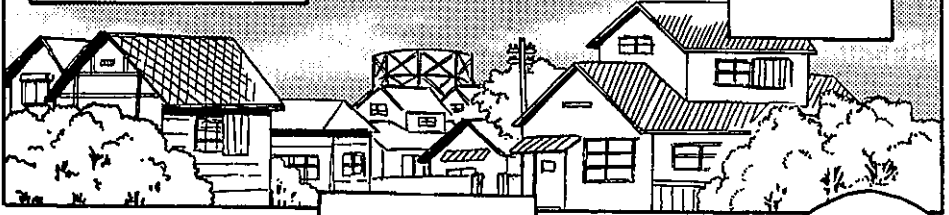


第二章
岐路——西ノ口時代



昭和四十年
(一九六五)
岐阜県笠松町

わたしは
赤塚とも子
これから杉山先生の
思い出を
語らせて
いただきます



あれからもう
七十年も
たつんですねえ
……

わたしは
幼い頃に
両親と死別し
遠い親戚に
引き取られました



そこは
子だくさんで
貧しい
家庭でした





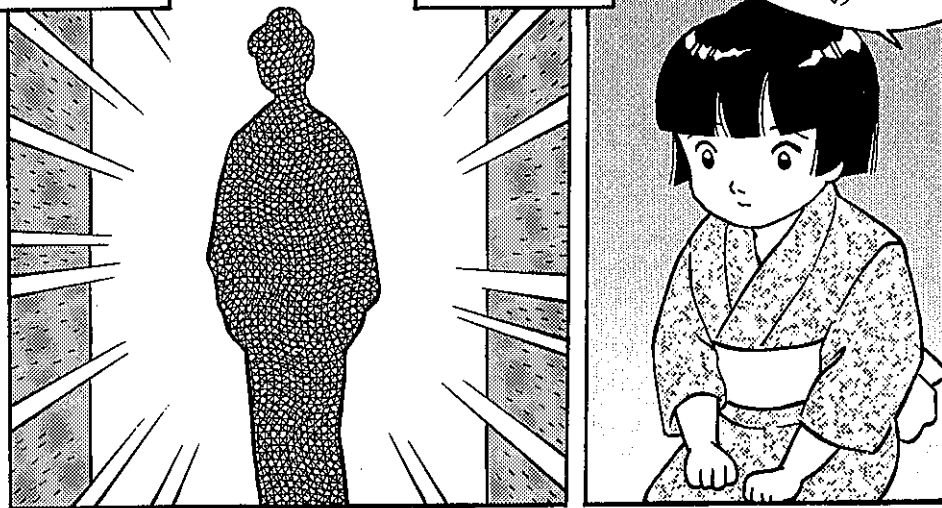
ねえあんた！
うちの子にまず
食べさせるのが
あたりまえだろ？

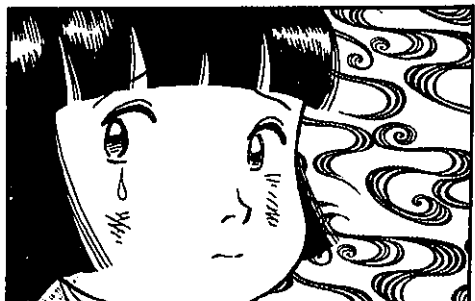
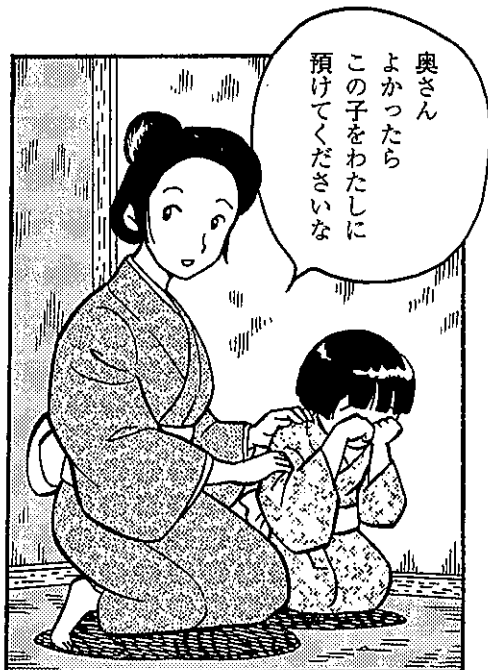
そんな
物欲しそうな目で
見るんじゃないよ
まったく！

世の中に
厄介者^{わざがし}って
ことばがあるの
知らないの
かい？

明治二十八年
(一九九五)
わたしが
十歳のときでした

そこに
あの方が
現れたのです





こんにちは
わたしは妹の
すてよ

先生の妹さんは
わたしより三歳
年上でした

ともちゃん
ぞうきは
こう絞るの！

いい？
ちゃんと見て
覚えるのよ



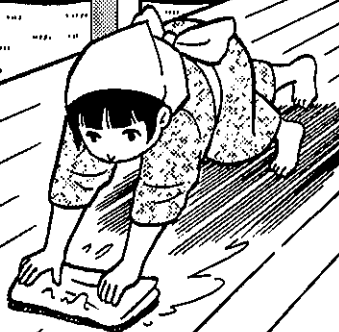
わかり
ましたか？

はい
……

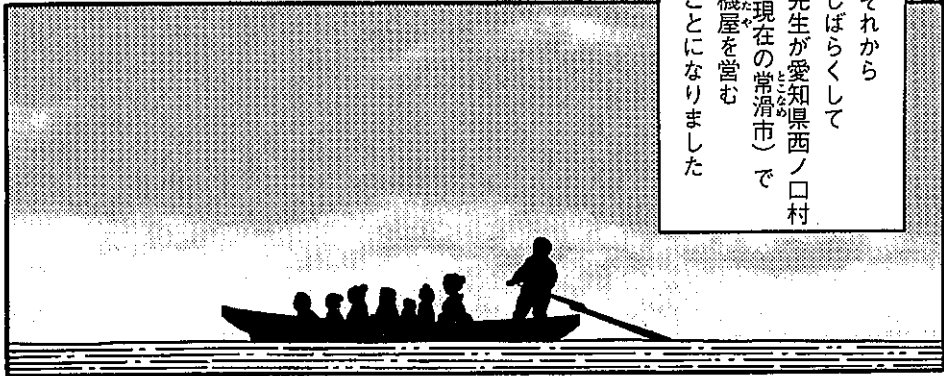
すてさんは
なにかにつけ
親のような
お姉さんぶった
口をきいて
くるのでした

それがときどき
癪にさわったり
しました

こうしてわたしは
杉山家に住み込んで
家のお掃除などの
雑用をまかされる
ようになりました



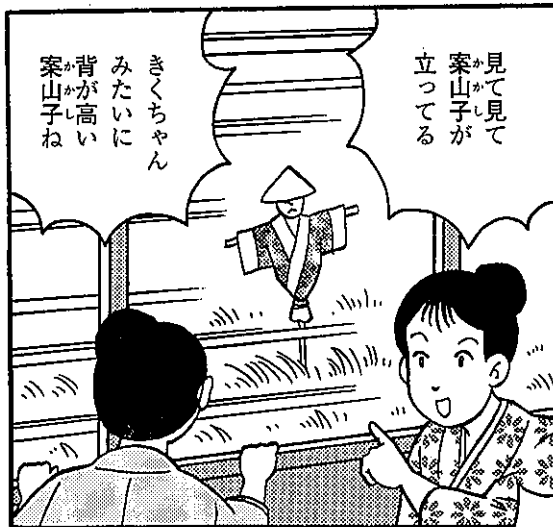
それから
しばらくして
先生が愛知県西ノ口村
(現在の常滑市)で
機屋を営む
ことになりました



木曾川驛

汽車よ!

ほんとうに
動くの
かしら!!

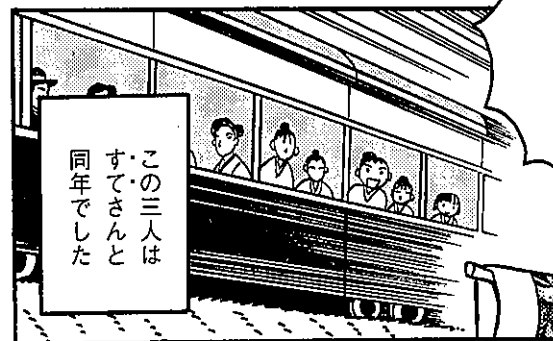


きくちゃん
みたい
に
背が
高い
案山
子ね

見て
見て
案山
子が
立っ
てる



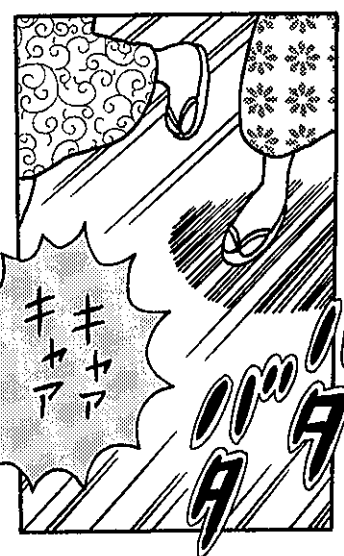
わあ
速い
速い
景色
が
飛ん
でい
くわ



この
三人
は
すて
さん
と
同
年
で
し
た

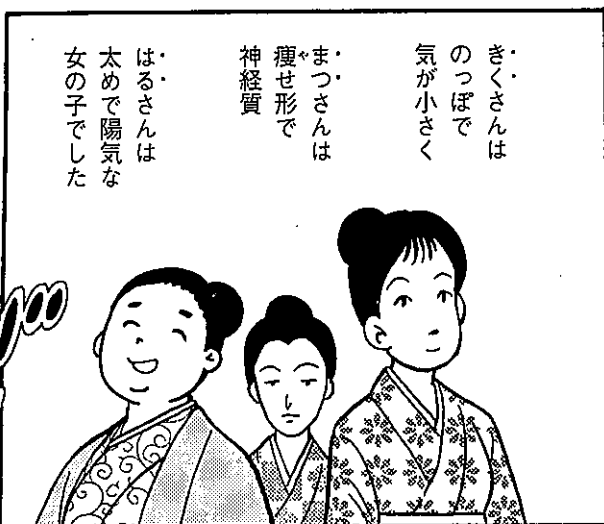


あつ
わた
し
み
た
い
に
ず
ん
ぐ
り
し
た
案
山
子
も
い
る
わ

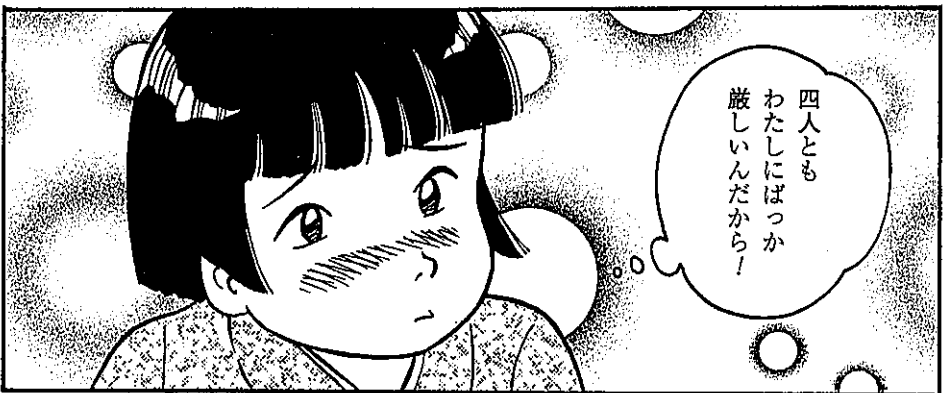
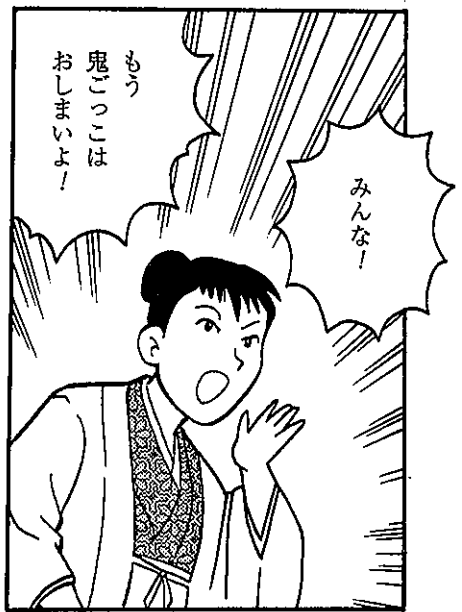
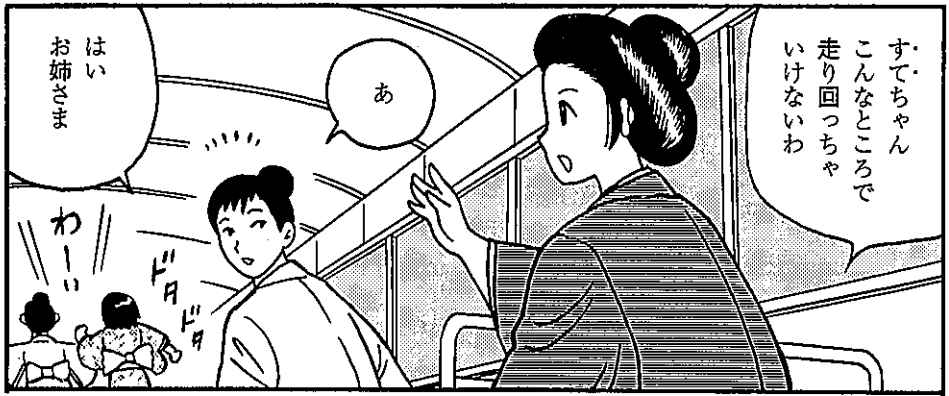


キヤア
キヤア

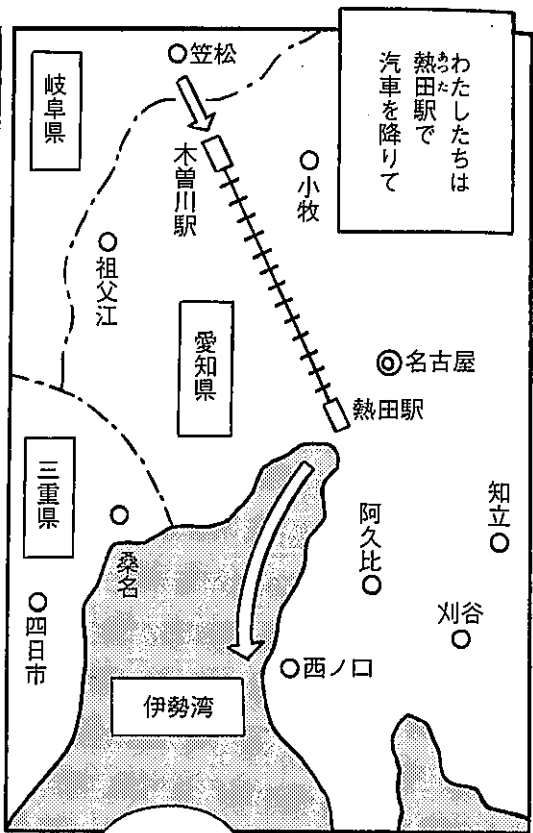
タタ
タタ
タタ



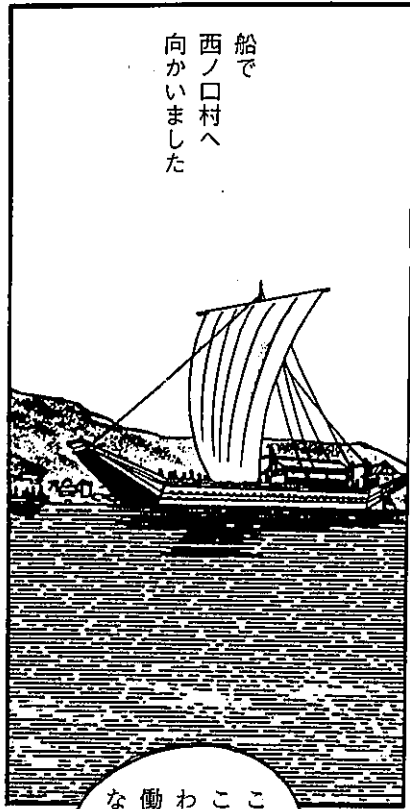
きく
さん
は
の
つ
ぼ
で
気
が
小
さ
く
まっ
さん
は
瘦
せ
形
で
神
経
質
はる
さん
は
太
め
で
陽
気
な
女
の
子
で
し
た



わたしたちは
熱田駅で
汽車を降りて



船で
西ノ口村へ
向かいました



あったわ！
あの建物よ

ここが
これから
わたしたちの
働くところ
なのね



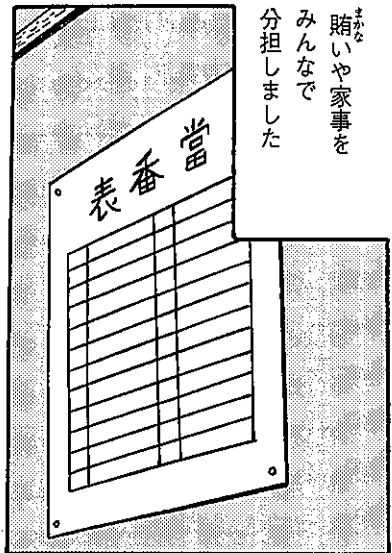
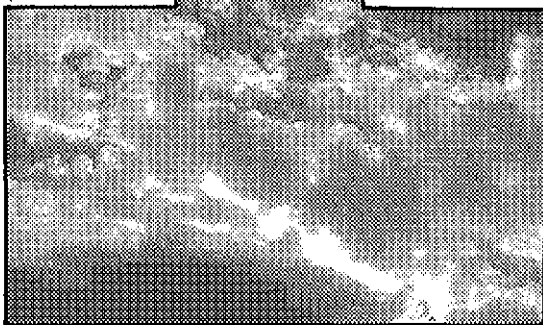


それから
毎日が
自炊の生活
でした

夜は日が落ちてても
仕事を
やめませんでした

夜明けとともに
起き出して
すぐに仕事を
はじめました

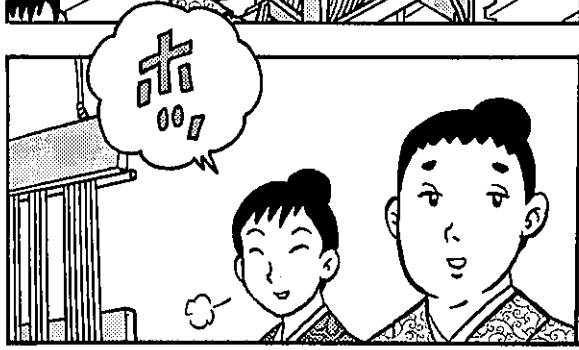
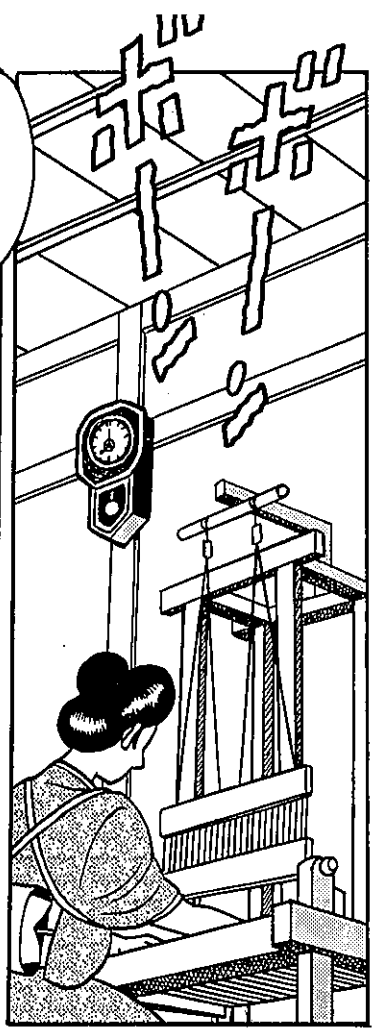
まかな
賄いや家事を
みんな
分担しました





きょうは
そろそろ
おしまいに
しましょウ

みんな
夜の八時です



ホッ



わたしは
もう少しだから
片づけちゃうわね

あなたたちは
さきに
眠ってなさい

はあー

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

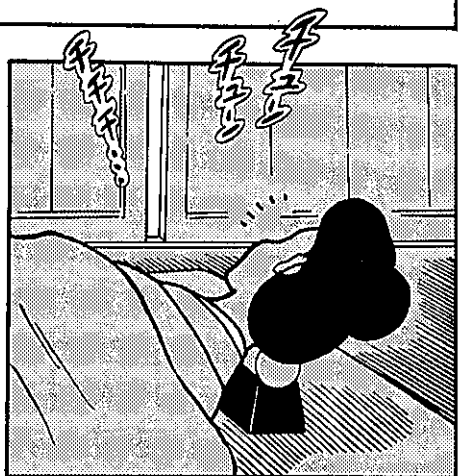
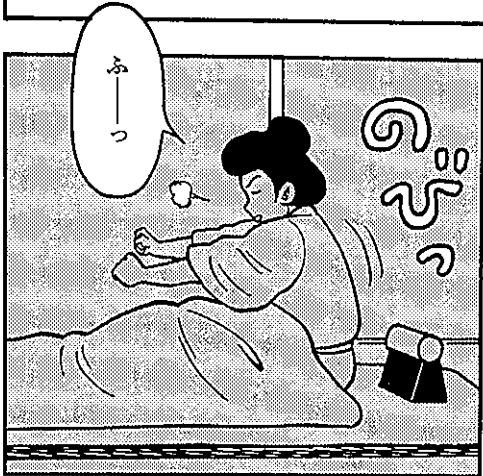
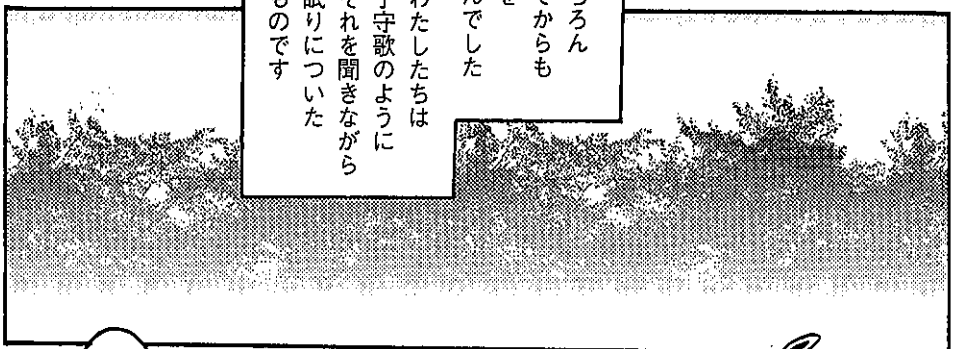
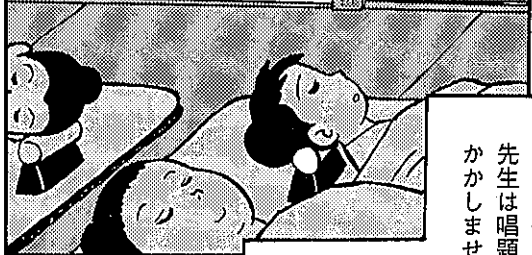
南無妙法蓮華經

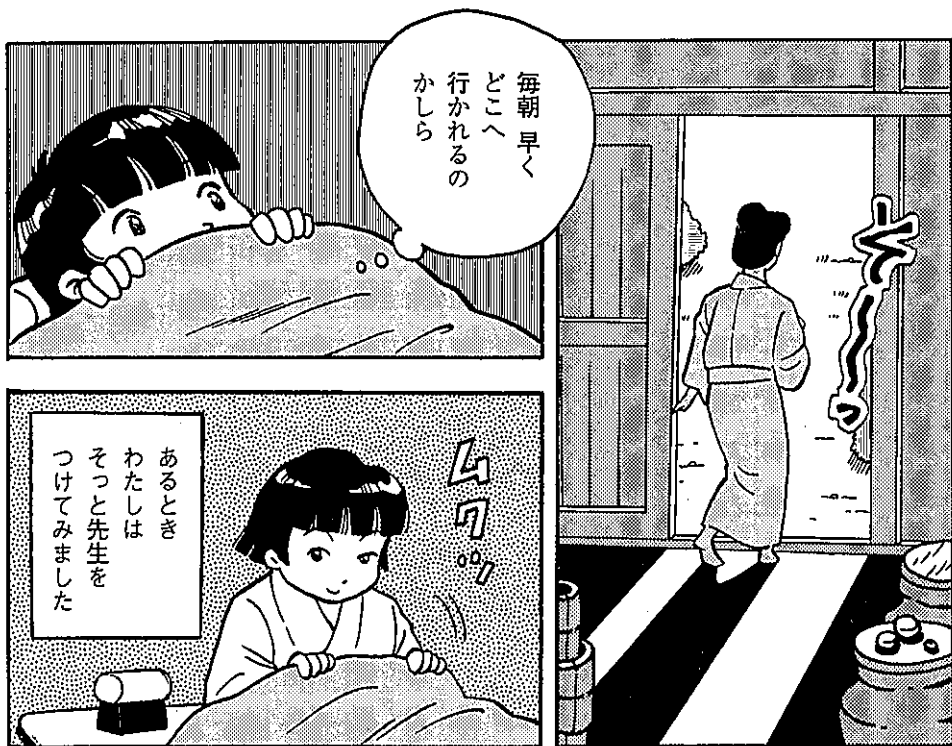
仕事中はもちろん
仕事を終えてからも
先生は唱題を
かかしてました

わたしたちは
子守歌のように
それを聞きながら
眠りについた
ものです

ふーっ

平五郎
平五郎
平五郎

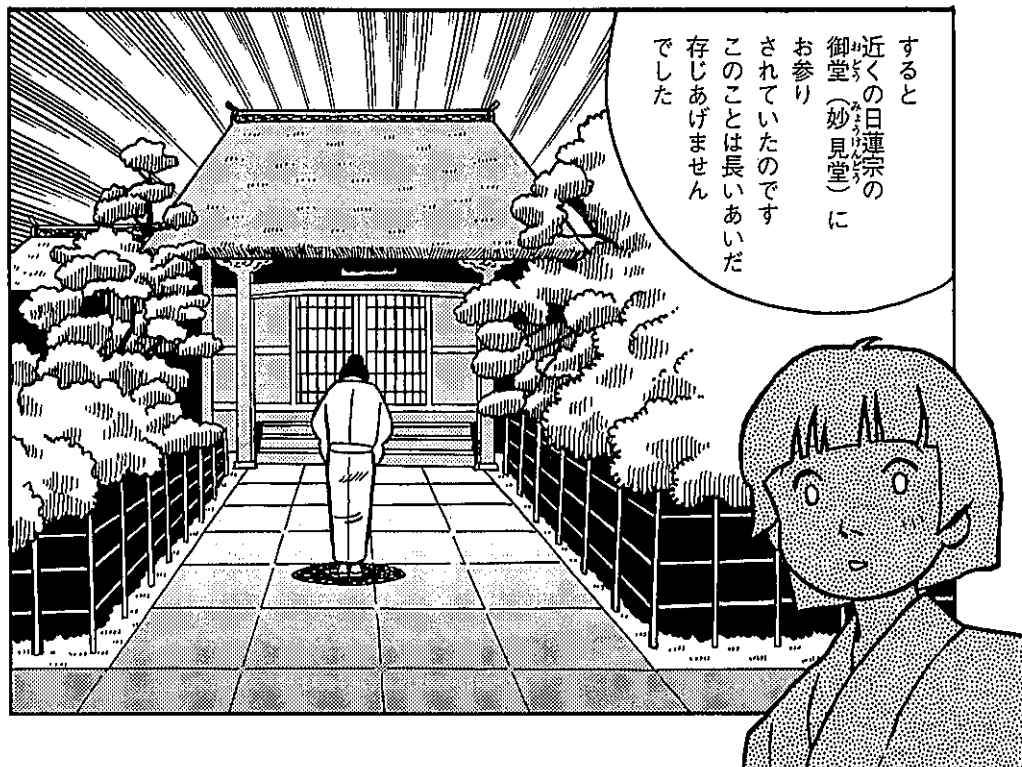


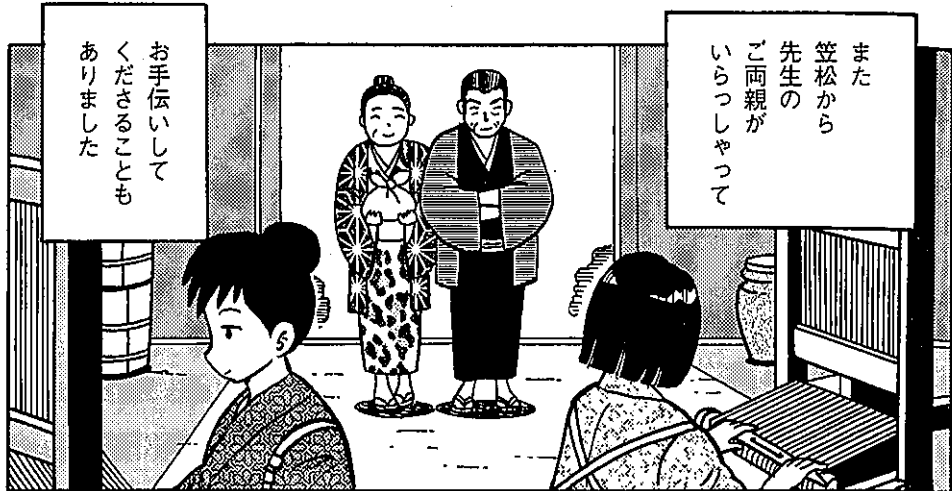


毎朝早く
どこへ
行かれるの
かしら

あるとき
わたしは
そつと先生を
つけてみました

すると
近くの日蓮宗の
御堂(妙見堂)に
お参り
されていたのです
このことは長いあいだ
存じあげません
でした





また
笠松から
先生の
ご両親が
いらっしやうて

お手伝いして
くださることも
ありました



地元の大野海水浴場で
泳いだことも
ありました



仕事が休みの日は
先生が踊りの稽古を
つけてくださったたり

芝居見物に
連れていって
いただいたことも

そして
あれは
先生が外出中の
こと――

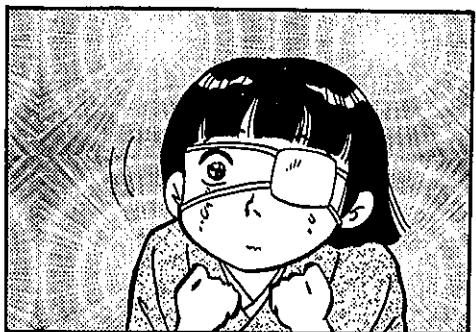
わたしも
病気に
ならない
かな

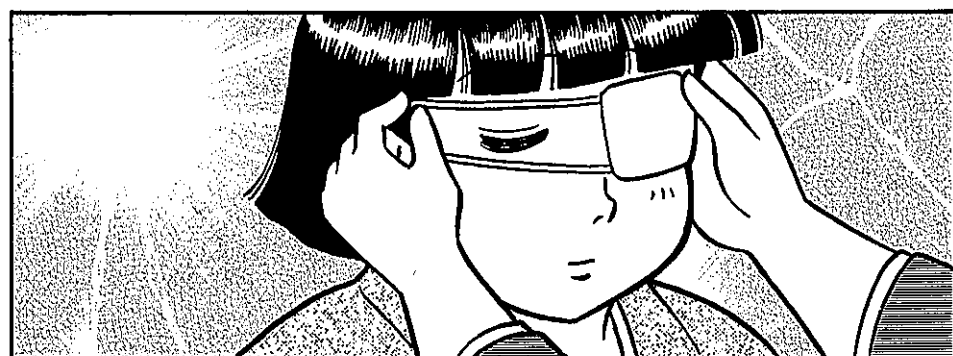
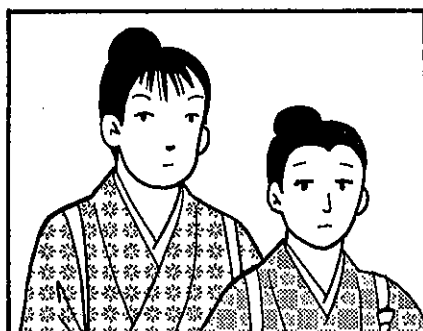
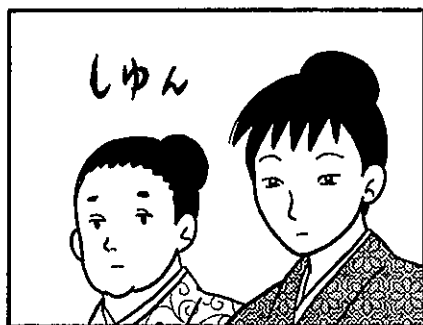
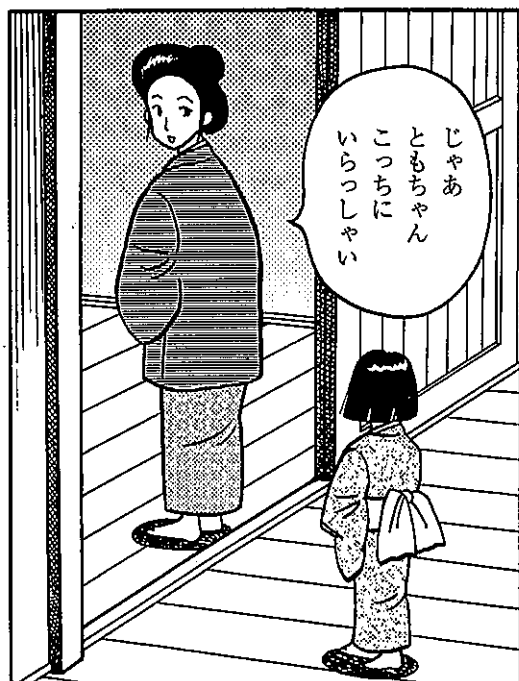
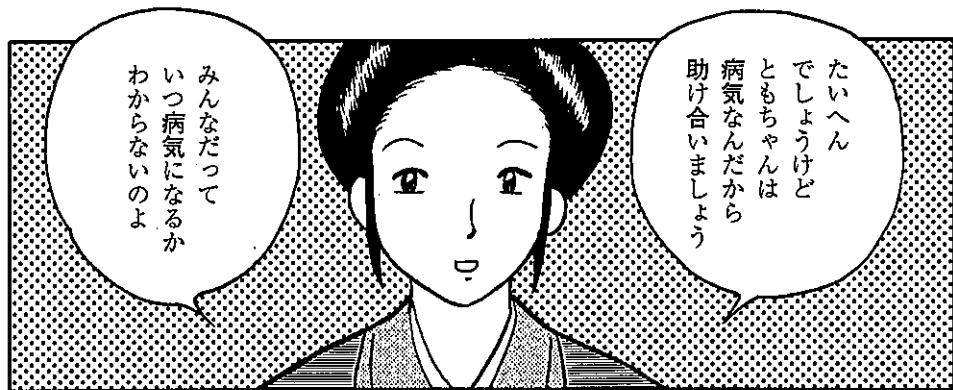
ほんと毎日
疲れちゃうわ

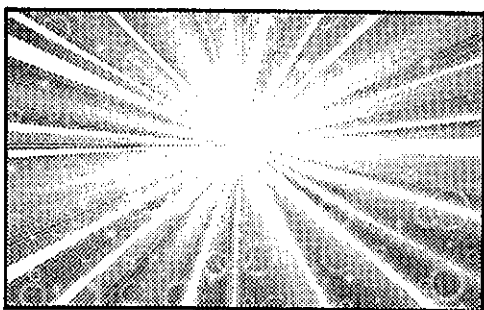
ともちゃんが
病気だから
いつもより余計に
仕事しなくちゃ
ならないわ

ともちゃん
早く治さないと
だめよ

あ



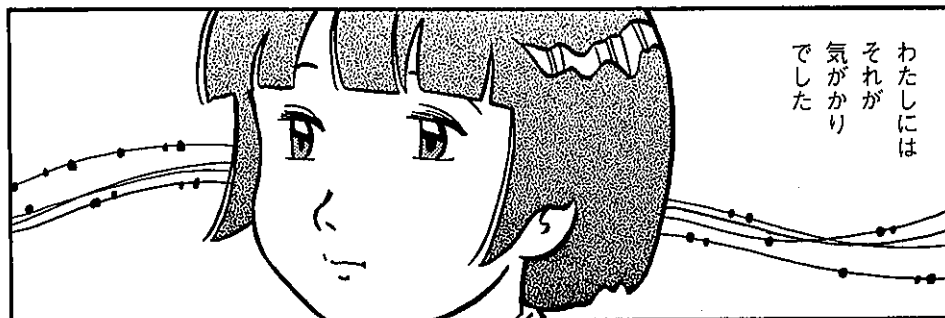
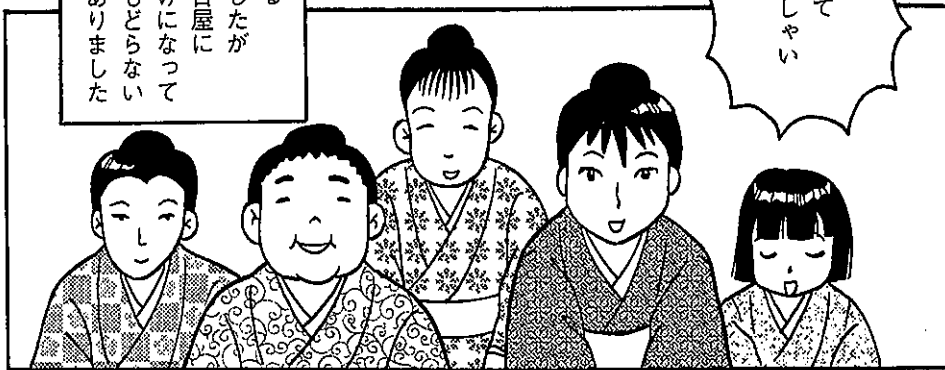


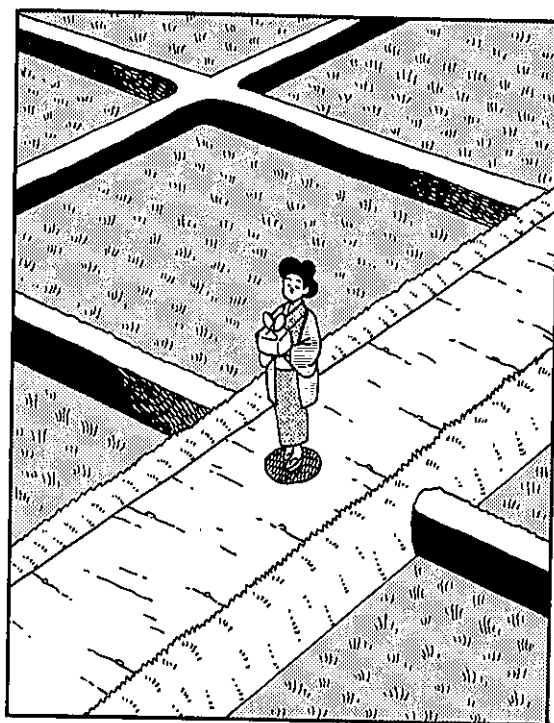
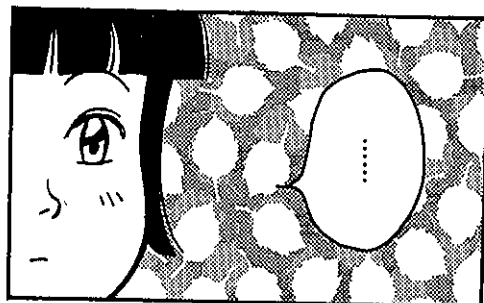


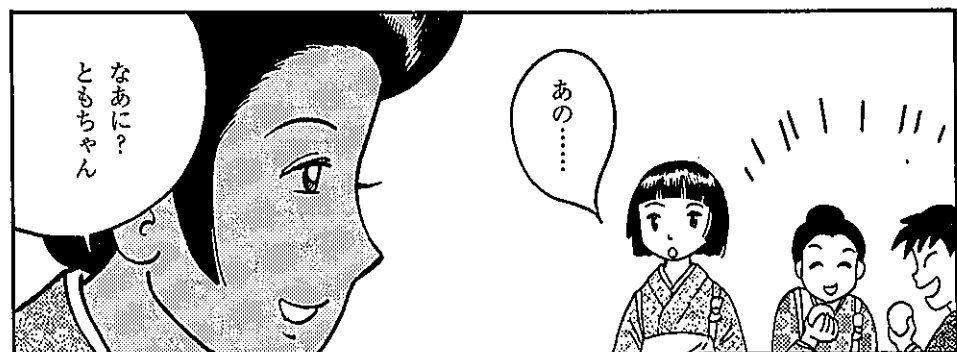
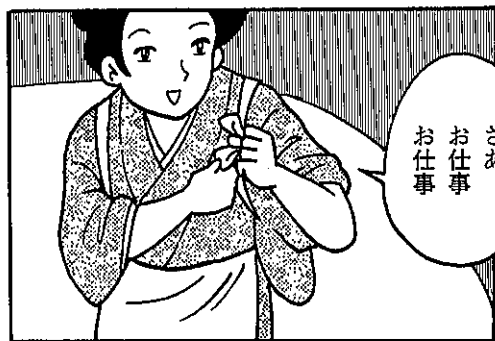
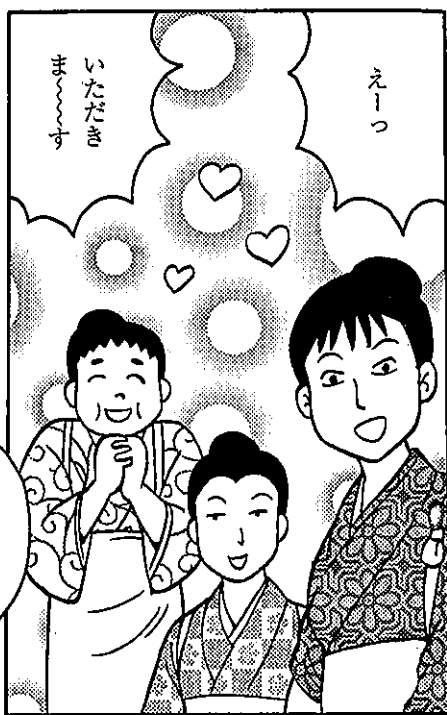
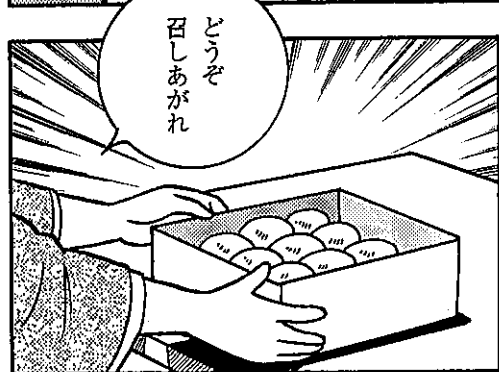




尊敬する
先生でしたが
よく名古屋に
お出かけになつて
何日ももどらない
ことがありました







三か月も
いったいなにを
してらっしゃったん
ですか？



それは
心配かけたわね

じつは……



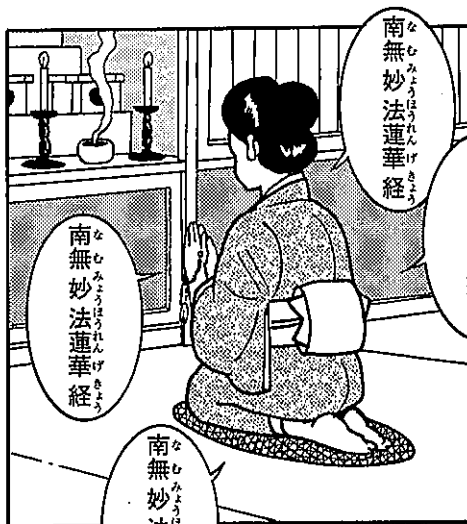
あら？

わたし
三か月も
いなかった？



先生は
名古屋の本立寺
というところで
百日間も
水行・断食の
修行をなさった
そうです





南無妙法蓮華經

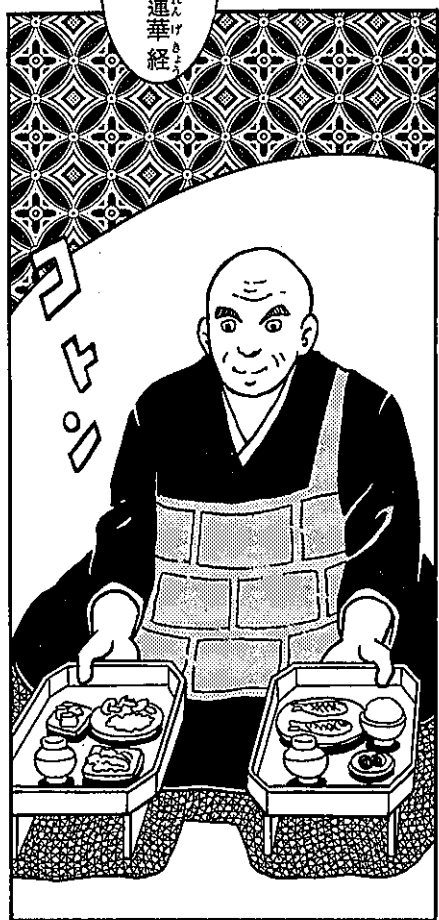
南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經



南無妙法蓮華經



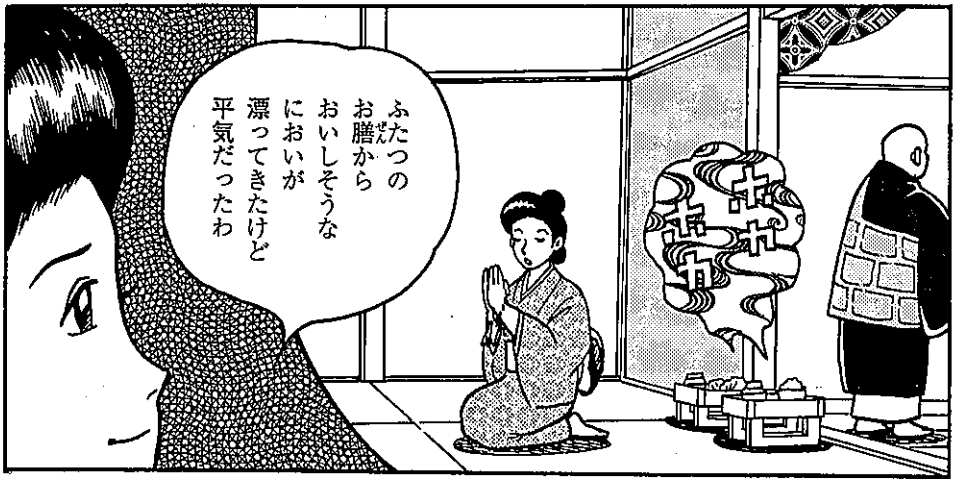
わたしが断食をつづけているのにご住職の名倉順慶さまつたら

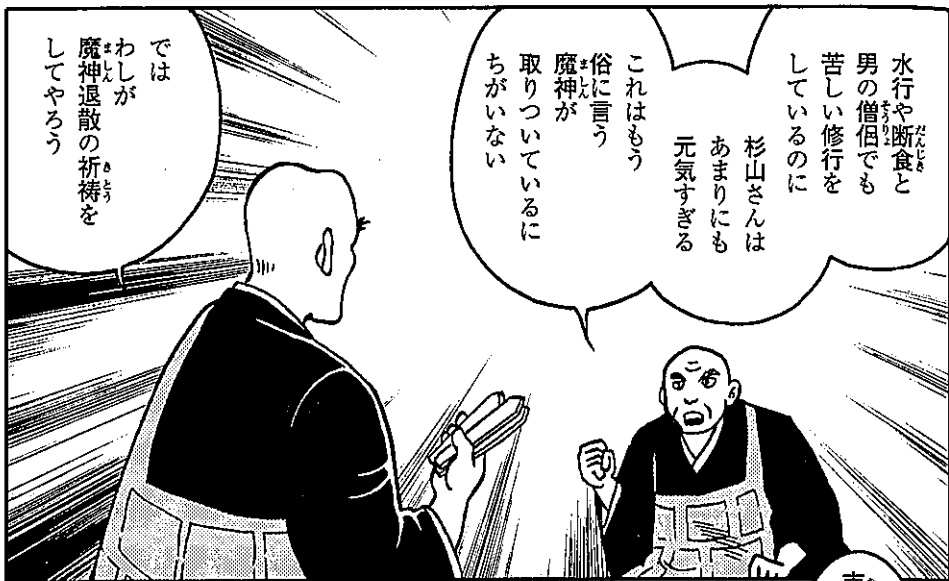
わたしが元氣なので疑いをもたれたらしくわたしを試されたのよ



試すつて？

それがね……





では
わしが
魔神退散の祈禱を
してやるう

水行や断食と
男の僧侶でも
苦しい修行を
しているのに
杉山さんは
あまりにも
元氣すぎる
これはもう
俗に言う
魔神が
取りついているに
ちがいない



魔神が取りついている
なんて
よく考えつくわよね

くす
くす



そんな厳しい
修行をしても
平然として
いらしたなら

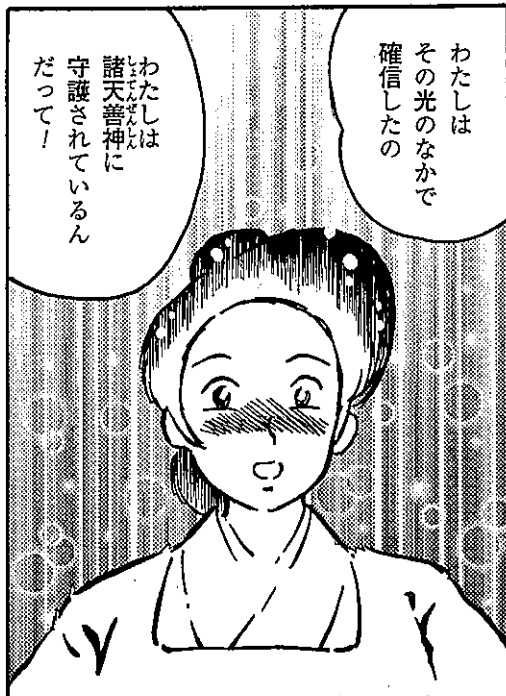
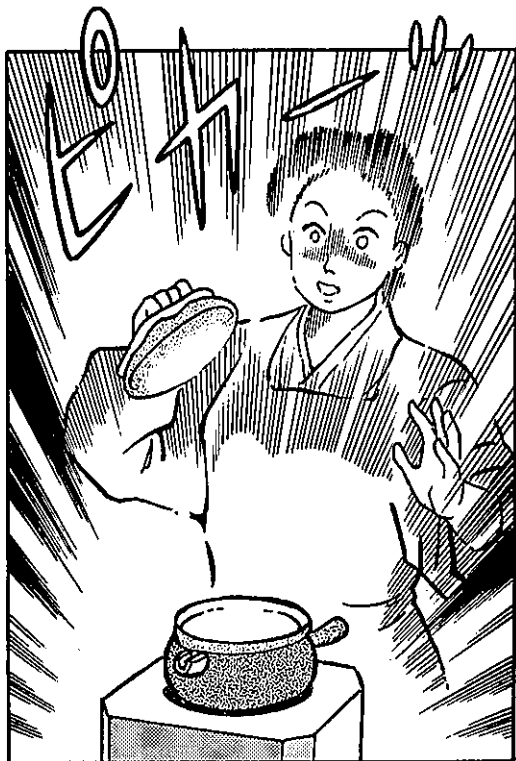
ふつうは
そう考えると
思います

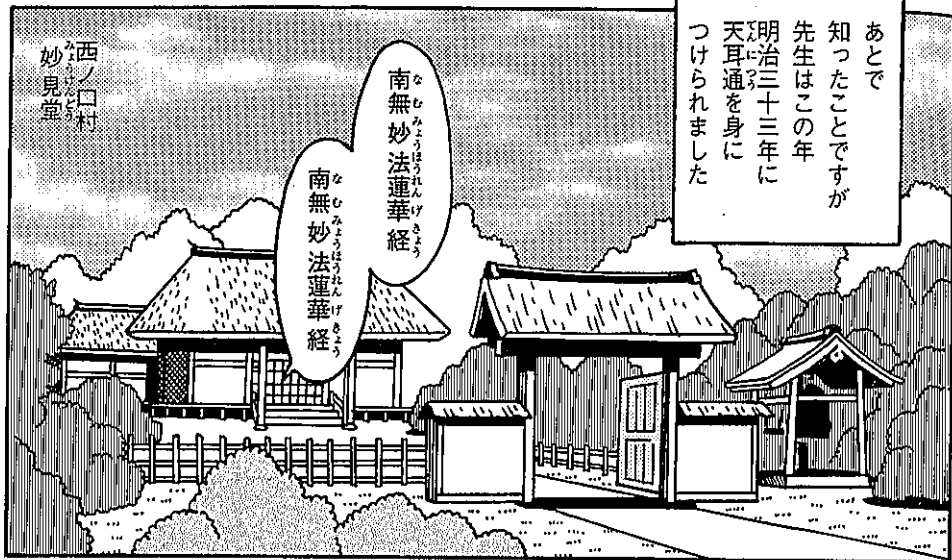


南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

修行師でもある
顕性寺のご住職が
祈禱しても
先生の修行ぶりは
それまでとちつとも
変わらなかつたそうです





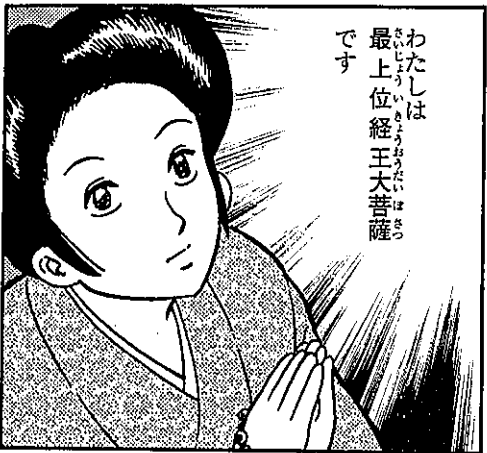
あとで
知ったことですが
先生はこの年
明治三十三年に
天耳通を身に
つけられました

南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經

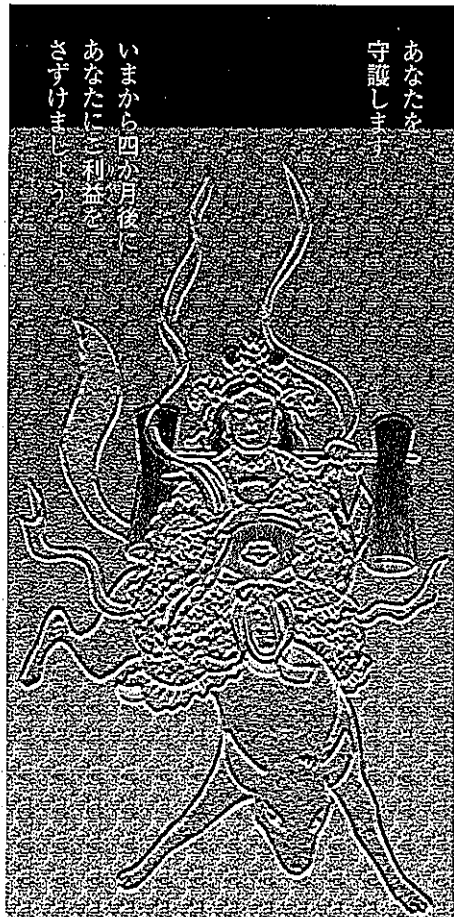
西ノ口村
妙見堂



顔を
おあげなさい
辰子さん

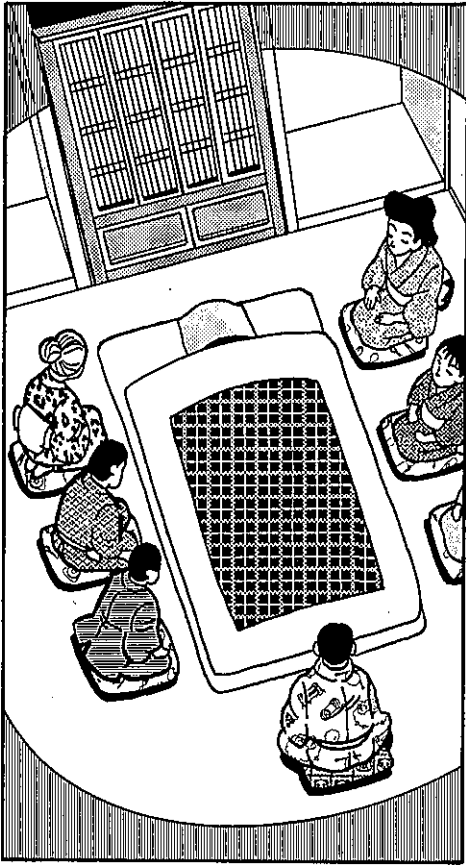


わたしは
最上位経王大菩薩
です

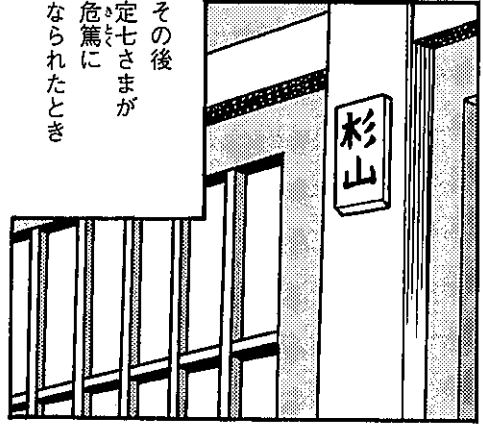


あなたを
守護します

いまから四か月後
あなたに利益を
さずけます

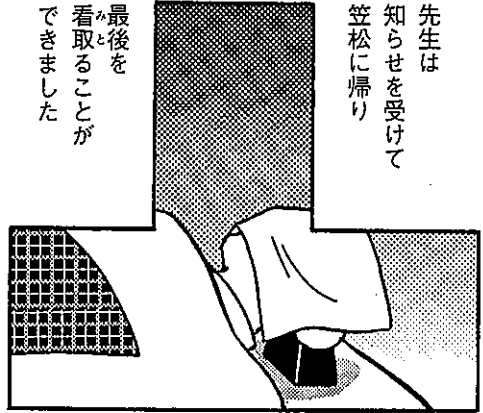


その後
定七さまが
危篤に
なられたとき



先生は
知らせを受けて
笠松に帰り

最後を
看取ることが
できました



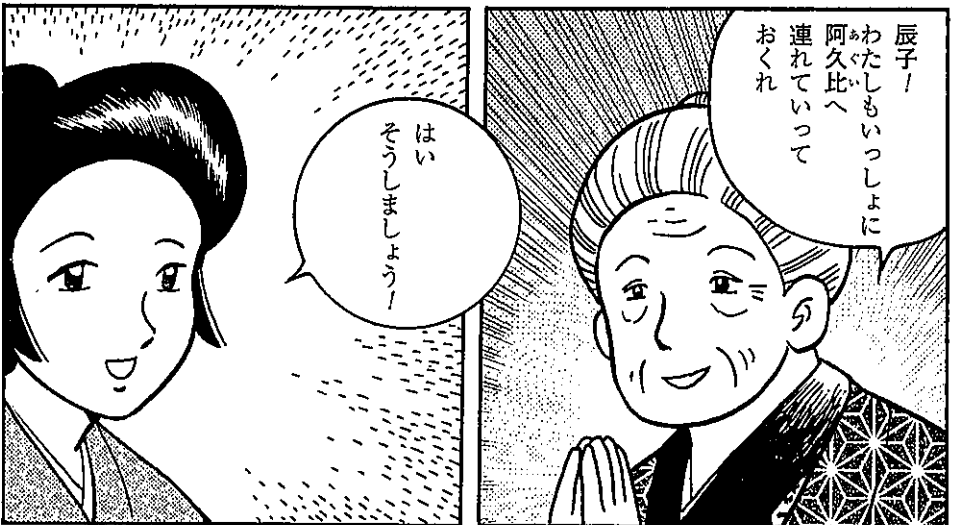
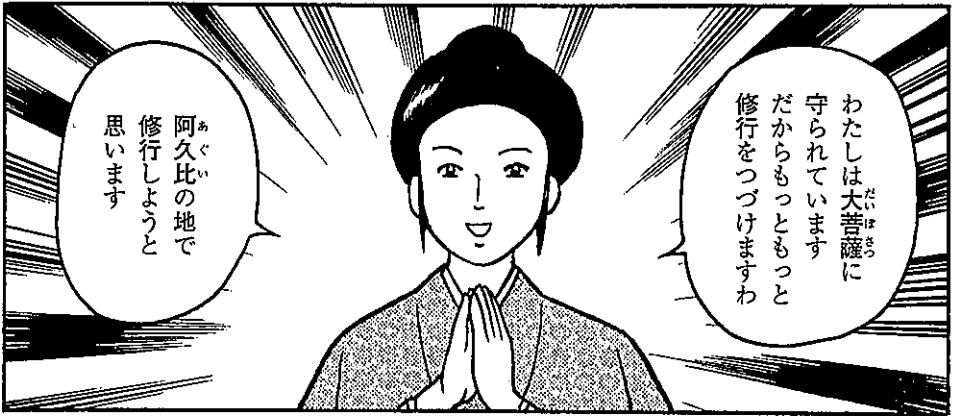
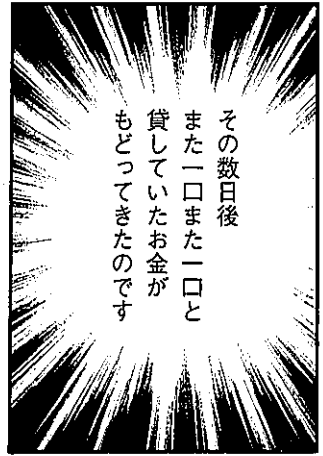
まだ
そこらへんに
いらして
声が聞こえ
そうですよ

お父さまが
いらっしやらないと
さびしいわね



その年の十月





西ノ口村にきて
七年目に突然
先生はつぎのような
宣言をされました



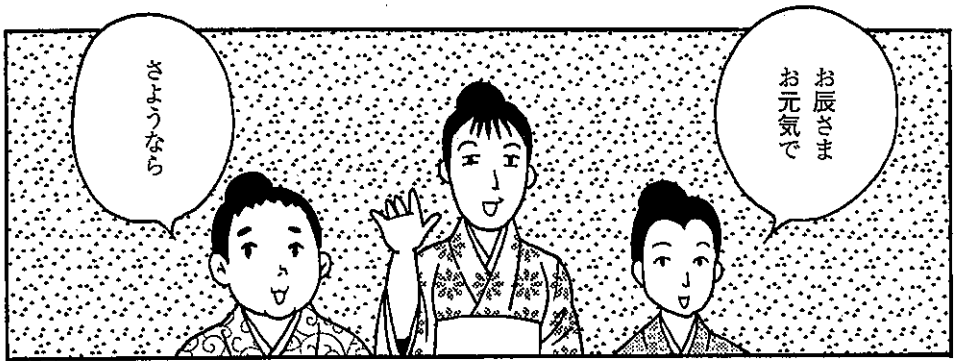
みなさん
ほんとうに
ご苦労さまでした

この機屋は
本日をもって
店じまいにします
気をつけて
お帰りくださいね



お辰さま
お元気で

さようなら



お元気で
さようなら

急な話で
もうなにか
なんだかわかりや
しないわ

大まか
な話
だった

